



四国防災八十八話

第二十四話 あの時すぐ逃げていれば

監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター

作画：岡野 真里英（愛媛大学美術研究会）

12月にしては暖かかった朝。

僕たち家族にそれは突然やってきた。地震だ！

目が覚めた僕は、布団の中で止むのを待った。

やがて、長い揺れはおさまった。



すぐに階段を降り、家族のもとに急いだ。

弟と妹をつれた、お母ちゃんとおばあちゃんの姿が見えた。

皆、玄関の前に集まった。

外も何だか騒がしい。みんな逃げているのだろう。

「お母ちゃん、僕らも逃げなあかん。」



しかし、お母ちゃんは、

「いや、これを2階へ上げてから逃げよう」と言った。

そこには、秋に収穫した米があった。

この頃は、食べるものが足りない時代で、

米はとても貴重なものだった。



米を2階へ上げようとした時、誰かが雨戸を叩いた。

“ドンドン”

「津波が来るぞ！はよう逃げえよ～！」

そう言い残すと足早に去って行った。

「お母ちゃん、もう逃げよう！」

僕は言った。



「あんた達は、先に逃げとれ」

そう言って、お母ちゃんが玄関の扉を開けた途端に、

“ドーン、ザー” っと

大量の水が流れ込んできた。



「みんな、はよう2階へ上がれ！」
というおばあちゃんの声で、僕たちは
2階へと駆け上がった。

お母ちゃんと、おばあちゃんは、
持てるだけの米を抱えて2階へ上がった。



海水の勢いは止むことなく、水音は次第に大きくなる。
様子を見に行ったお母ちゃんが、
「階段の上まで、波が来とる」と言った。

おばあちゃんが、「もう、あかんか分からん。
死ぬんやったら、みんな一緒や」と言って、
みんなが手を握り、輪になった。



“ドーン、ドドーン”

**突然、何かが家にぶつかる音と共に、家が潰され、
僕らは水中へ流された。**

その時、しっかり握っていた手が離れてしまった。



バラバラになった家族を、僕は無我夢中で探した。

しかし、お母ちゃんの姿は、見当たらなかった。

今でも、あの時、欲を捨てて、すぐに逃げていれば、

みんな助かったのではないかと悔やまれます。